

【旧約聖書日課】創世記 18章1～15節

<sup>1</sup>主はマムレの樫の木の所でアブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。<sup>2</sup>目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、<sup>3</sup>言った。

「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。<sup>4</sup>水を少々持って来させますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。<sup>5</sup>何か召し上がるものを調べますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」

その人たちは言った。

「では、お言葉どおりにしましょう。」

<sup>6</sup>アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。

「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。」

<sup>7</sup>アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。<sup>8</sup>アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。

<sup>9</sup>彼らはアブラハムに尋ねた。

「あなたの妻のサラはどこにいますか。」「はい、天幕の中におります」とアブラハムが答えると、<sup>10</sup>彼らの一人が言った。

「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」サラは、すぐ後ろの天幕の入り口で聞いていた。<sup>11</sup>アブラハムもサラも多く目を重ねて老人になっており、しかもサラは月のものがとうになくなっていった。<sup>12</sup>サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。

<sup>13</sup>主はアブラハムに言われた。

「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。<sup>14</sup>主に不可能なことがあるのか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている。」<sup>15</sup>サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした。」主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」

【福音書日課】ルカによる福音書 3章1～14節

<sup>1</sup>皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリボがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、<sup>2</sup>アンナスとカイアファが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリヤの子ヨハネに降った。<sup>3</sup>そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。<sup>4</sup>これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。

「荒れ野で叫ぶ者の声がある。」

『主の道を整え、

その道筋をまっすぐにせよ。

<sup>5</sup>谷はすべて埋められ、

山と丘はみな低くされる。

曲がった道はまっすぐに、

でこぼこの道は平らになり、

6人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」。

7そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。8悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言っておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。9糸は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」10そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。11ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。12徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。13ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。14兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

## 「お客さまは神さまです」【こども説教のために】

日曜日の礼拝や平日の集会で教会においでになる方をお迎えするとき、幾人かの方とは、「ただいま」、「お帰りなさい」と挨拶を交わしています。教会からお帰りになるときは、「行ってきます」、「行ってらっしゃい」と交わします。その方たちは、教会をご自分の帰る「家」としてくださっているのです。教会を、ご自分の「家族」としてくださっているのです。わたしは、どなたともそのように挨拶を交わしたいと思っています。

もちろん、はじめておいでくださった方に、そのような挨拶をしたりはしません。「ようこそ、おいでくださいました」と、「お客さま」としてお迎えます。教会の皆さんを「お客さま」として扱うことはありません。皆さんは「家族」です。けれども、はじめてのときは皆、「お客さま」です。わたしたちは、「家族」も大事にしますが、「お客さま」をもっと大事にするのです。主イエスがそのようにお教えくださったからです。主イエスは、「それは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ 25:40）とおっしゃいました。

アブラハムも、「お客さまは、神さまだった」と気づいた人でした。彼は、三人の旅人を歓待しました。年を取った自分たち夫婦の間に子どもが生まれるだろうなどと、少し驚くようなことを言う人たちでしたが、追い返したりせず、この後、三人をしばらく見送って行きました。その人たちの行く先を教えられて、彼は、三人が「主なる神」と「御使いたち」であると気づかされたのです。

教会の「家族」の皆さん。ここで、「家族」の帰りを互いに待ちながら、「お客さま」がおいでになるのを迎えましょう。わたしたちの「家」に、神は、そのようにしておいでくださるのです。

## 「来年の今ごろ、また来ます」

今日は、教会暦では「聖徒の日」と定められていますから、多くの教会が「永眠者記念礼拝」とされていることでしょう。わたしたちの教会は、10月中に「在天会員記念礼拝」として執り行いましたから、皆さんの中には、今日のご自分の家族などが記念されている他の教会に出席されている方もあるようです。そのような方の多くは、出席された教会では、古い「家族」として、あるいは「お客さま」として、迎えられていることでしょう。そして、お帰りに際しては、その教会の方々と、「来年の記念礼拝に、また来ます」と約束されて来られるのではないのでしょうか。わたしたちの教会でも、一年に一度の記念礼拝においでくださる方が、そのようにお約束くださるがあります。

アブラハムの天幕を訪れ、食事の歓待を受けた三人の旅人も、繰り返し、「**来年の今ごろ、また来ます**」（創 18:10、同 14 節）と語っていました。人はだれでも、客として歓迎されれば、そのように再会の約束をして行くものなかもしれません。「来年は、来るか分かりません」と言って去って行かれたら、その人に来るつもりはほとんどないでしょう。「二度と来ません」と言われたら、よほどひどい扱いをしてしまったということです。ただし、「また来ます」と言った人が、再び来られるとも限らないようです。この三人の旅人も、翌年の同じところにアブラハムの天幕を訪ねてきたとは、「創世記」のどこにも物語られてはいないのです。

もちろん、それは、この三人が約束を破った、ということではないでしょう。この三人のうち一人は「**主**」（同 10 節および 14 節）なのですし、二人は「**御使い**」（同 19:1）なのです。そして、「**来年の今ごろ**」と彼らが言った時期に、アブラハムとサラの天幕には、確かに迎えられていたのです、「新たに迎えるべき者」が。サラが産んだ子、イサクです。

教会では、一年前には「お客さま」としてお迎えしていた人が、翌年には「家族」の一員として新たな「お客さま」をお迎えする者となってくださっていることが少なくありません。その人は、最初は「お客さま」としてお迎えしましたが、教会という「家族」の「家」で、「子」として生まれたのです。

「洗礼」は、教会という「神の家族」の「家」で「神の子」として生まれ出ることのしるしです。「神の子」として生まれ出たら、その人は、「神の家族」の一員として、日々、この「家」で養われ、育ち、「家族」の一員らしくなって行きます。もちろん、この「家」では「神の子」として生まれ出ない方もあるかもしれません。「家族」の「胎内」に「神の胎児」としてとどまり続ける方もあります。その人が、いつか生まれ出ることか、他の「家」で生まれ出ることか。それは、「**また来ます**」と言われる主がご存じのことです。

## 「あなたは確かに笑った」

日曜日の礼拝を終えて、教会の皆さんが、この「家」からそれぞれの生活の場へと出て行かれた後、教会に残ったわたしは、会堂入口から一番近い部屋に居続けるようにしています。牧師によっては、さっさと牧師館に引き上げてしまう方もありますが、わたしは、できる限り、いつ「お客さま」が訪ねて来ても対応できるようにしていきたいのです。ちょうど、アブラハムが**暑い真昼に…天幕の入口に座っていた**ように。

教会には、皆さんが想像する以上に、いろいろな方が訪ねて来られます。気のせい、土曜日や日曜日の夕方に多いようです。記憶を辿って見たら、二週間前の土曜日、先週の日曜日、そして昨日の土曜日と、きまって夕刻に突然の来客がありました。「何日も何も食べていない」という方には、少しの食事を提供することもありました。要求が満たされなかったのか、腹を立て、捨て台詞を吐いて出て行かれた方もありました。そういう「お客さま」も「神さま」なのかと、悶々とすることもあるのです。

昨晩は、年配の男性が手に鍵を持って入って来られて、「ここに自分の部屋があるはずだけれども」とおっしゃるのです。きちんとした身なりの方でしたので、「ここは教会ですよ」と申しましたら、「ああそうか」という顔をされて出て行かれたので、そのまま見送りました。少し気が引けましたが、日曜日の準備がありましたから、すぐに忘れてしまいました。それから小一時間ほど経って、ちょっとそこまで買い物にと道に出ましたら、先ほどの男性がガードレールに寄り掛かって立っていらっしやいました。頭の中は今日の「アブラハム」のことで一杯でしたが、それが却ってわたしを立ち止まらせました。帰り道が分からなくなっているのでしょうか。すぐその警察署まで一緒に行きましたら、ご家族から捜索願が出されたばかりの方でした。

買い物を済ませたの帰り道、わたしは、苦笑いが抑えられない気分でした。まさか、その方がアブラハムの天幕に訪ねてきた三人の旅人のような「主」や「御使い」だった、ということがあるのでしょうか。土曜日の夕べ、牧師を試すために神があの方をお遣わしになるというようなことが、あるのでしょうか。自分のこととアブラハムの逸話を結びつけて、何をバカバカしいことを考えているのかと、一人で笑っていたのです。

そのわたしに、主は「**なぜ…笑ったのか**」と言われるのでしょうか。「**あなたは確かに笑った**」と言われるのでしょうか。確かに、わたしは、「そんなことを神がなさるはずがない」と、心の中で秘かに笑っていました。

けれども、そのわたしに、主は言われるでしょう、「**わたしはここに戻って来る**」と。神は、おいでになるのです。御業の計画をお進めになられるのです。その実現を見る日に、わたしは皆さんと共に笑うことにいたしましょう。